

第4回 石岡市文化財調査報告会 発表要旨

第4回 石岡市文化財調査報告会・発表要旨

丸山古墳・佐自塚古墳出土の 副葬ガラス小玉について	加藤千里	2
鹿の子大塚山古墳 「常陸国」成立の鍵を握る古墳	谷仲俊雄	8
かすみがうら市愛宕山古墳群と その周辺	大久保隆史	14
石岡市舟塚山古墳からみた 5世紀の大変革	田中裕	18

一〇一八

2018

石岡市教育委員会
常陸風土記の丘

石岡市教育委員会・常陸風土記の丘

例 言

1. 本書は、2018（平成30）年8月25日（土）に開催する「第4回 石岡市文化財調査報告会」（主催：石岡市教育委員会、共催：常陸風土記の丘）の発表要旨です。
2. 本書の執筆は各報告者が行いました。編集は石岡市教育委員会 文化振興課が行いました。
3. 報告会の開催にあたり、下記の方々からのご協力とご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

茨城大学人文社会科学部考古学研究室 かすみがうら市歴史博物館
上高津貝塚ふるさと歴史の広場 明治大学文学部考古学研究室

第4回 石岡市文化財調査報告会 プログラム

開催日 2018（平成30）年8月25日（土）

会 場 常陸風土記の丘 研修室

10:00	丸山古墳・佐自塚古墳出土の 副葬ガラス小玉について	加 藤 千 里
10:40	鹿の子大塚山古墳 ～「常陸国」成立の鍵を握る古墳	谷 仲 俊 雄
11:20	かすみがうら市愛宕山古墳群と その周辺	大久保 隆 史
12:00	休憩	
13:00	石岡市舟塚山古墳からみた 5世紀の大変革	田 中 裕
15:00	関連展示「石岡を掘る4」展示解説	

丸山古墳・佐自塚古墳出土の副葬ガラス小玉について

上高津貝塚ふるさと歴史の広場 加藤千里

遺跡から出土するガラス小玉の概要

ガラス小玉は主に埋葬に伴う副葬品として、弥生時代後期以降、日本列島の広い範囲で認められる遺物です(小寺 2016)。その大半が、「引き伸ばし法」で作られた単色のビーズです。同様の特徴をもつガラス小玉やその生産遺跡は紀元前後数世紀のアジアの広域において見つかっており、インド-パシフィックビーズと呼ばれています(Francis 1990)。一方、日本列島では「引き伸ばし」のガラス小玉の生産遺跡が未発見であることや近年盛んに行われるようになったガラスの化学組成分析の成果から、当時の日本列島で用いられたガラス小玉の大半は、列島外から搬入された舶載品であると考えられています(肥塚・大賀・田村 2010, 田村 2015)。列島外から流入したガラス小玉は、いくつかの経路を通じて、日本列島の広域に流通したものと考えられます。したがって、ガラス小玉の分布状況に注目することで、列島内外の物流や人の流れの一端が明らかになることが期待されます。

本稿では、石岡市所在の前期古墳である丸山古墳と佐自塚古墳から出土したガラス小玉を考古科学的な手法を用いて調査した結果を報告します。

資料について

丸山古墳（4世紀）は、石岡市柿岡に所在し、霞ヶ浦に注ぐ恋瀬川の中流域に位置する柿岡古墳群の丸山支群の中心的な古墳である全長 55m の前方後方墳です。副葬品として鏡 1 面、銅鏡、大刀、剣、刀子、勾玉 9 点、碧玉製管玉 95 点、ガラス小玉 138 点が出土しています。また、佐自塚古墳（4世紀）は石岡市佐久に所在し、柿岡古墳群の佐久支群を構成する全長 59.2m の前方後円墳です。副葬品として刀子、勾玉、管玉、竹櫛、小型埴とともにガラス小玉が 8 点出土しています。

このうち、丸山古墳出土ガラス小玉 71 点と佐自塚古墳出土ガラス小玉 8 点を対象として、製作技法の検討及び化学組成分析を行いました。

ガラスの特性とガラス小玉の製作技法

ガラスは主成分である二酸化ケイ素に融剤としてアルカリ元素や鉛を加えることによりできる非結晶の物質で

す。非結晶のため明確な融点や沸点がなく、加熱すると徐々に柔らかくなるという性質をもっています。そのため、熱を加えることで自由に成形することができるほか、鋳直して何度も新たに成形することができます。

また、銅 (Cu) やコバルト (Co)などの着色剤を添加することで比較的の自由に着色することができます(中井 2013)。これらの特性を活かしてガラス小玉が製作されます。ガラス小玉の製作技法には、「引き伸ばし」「巻き付け」「鋳造」「加熱貫入法」「連珠」等が挙げられ(大賀 2002, 福島 2006)、どの技法が用いられたかは、完成品にみられる形態上の特徴から判断することができます。

鋳型に粉末状のガラスを入れ、加熱する「鋳造」による小玉は、鋳型に接しない面が表面張力により丸みを帯び、側面にしばしばザラメ状の溶け残りや突起がみられます。また、軸に溶かしたガラスを巻き付ける「巻き付け技法」によりつくられた小玉は、全体が丸みを帯びて端面がなく、孔と直交する方向に伸びる気泡や、巻き残りが認められる場合があります。「連珠」はガラス管に軸を通して、括れをいれる技法であり、両端面がすばんだ形状となることで判別できます。「加熱貫入法」は主に算盤玉をつくるのに用いられる手法です。また、「引き伸ばし法」は、加熱して柔らかくしたガラス種を引き延ばすことでできる中空の管を切り分け、切片の端面を整形するというものです。丸山古墳・佐自塚古墳から出土したガラス小玉は全て、側面・孔面が平滑で、端面に整形処理が施されていることから、「引き伸ばし法」で製作された小玉であることが明らかになりました。

ガラスの化学組成と分類

ガラス小玉は形態上の違いに乏しいため、研究には化学組成分析が不可欠です。弥生・古墳時代に日本列島で流通していたガラスは、融剤など材料の違いに起因する化学組成の違いから、鉛ガラス、鉛バウムガラス、カリガラス(高アルミナタイプ・低アルミナタイプ)、アルミニナソーダ石灰ガラス、植物灰ソーダ石灰ガラス、ナトリンガラスに分類されます。これらの分類は原料ガラスおよびガラス小玉の生産地の違いを示すと考えられます。

分析方法

丸山古墳、佐自塚古墳出土ガラス小玉の化学組成を明らかにするため、高性能可搬型蛍光 X 線分析装置 OURSTEX100FA-IV およびハンドヘルド型蛍光 X 線分析装置 Niton XLt-900S を用いて、ガラス小玉の組成分析を行いました。本調査で用いた蛍光 X 線分析装置は遺跡や資料館に持ち込むことができる点、対象資料を非破壊・非接触で分析することが可能であるという点から、文化財の調査に適しているといえます。

結果及び検討

化学組成分析の結果、丸山古墳出土ガラス小玉はアルミナソーダ石灰ガラスが 60 点と最も多く、低アルミナカリガラスが 6 点、高アルミナカリガラスが 5 点であることが明らかになりました。また、佐自塚古墳出土ガラス小玉は、アルミナソーダ石灰ガラスが 5 点、高アルミナカリガラスは 3 点という結果となりました。

両古墳から出土した高アルミナカリガラス及びアルミナソーダ石灰ガラスは全て銅 (Cu) 着色による淡青色を呈しており、見た目上の違いはほとんどありませんが、高アルミナカリガラスが弥生時代の主体的なガラスであるのに対し、銅着色のアルミナソーダ石灰ガラスは 4 世紀頃から流通しはじめ、高アルミナカリガラスに入れ替わることが主に西日本の資料の分析事例から指摘されています (Oga・Tamura 2013)。今回の分析の結果を含めた、常陸前期古墳出土ガラス小玉の組成タイプの内訳を見ると、高アルミナカリガラス主体からアルミナソーダ石灰ガラス主体になることが確認され、西日本と連動した様相を示すことが明らかになりました。

また、丸山古墳の低アルミナカリガラスは、ほとんどがコバルト (Co) 着色による紺色を呈していました。コバルト着色の低アルミナカリガラス小玉で特に直径 7 mm 以上の大型品は、弥生時代後期後半から古墳出現期にかけての東京湾沿岸地域に特徴的に多く認められるもので、常陸の前期古墳からの出土例は多くありません。

以上の点から丸山古墳は、常陸の前期古墳の中で、最も多様なガラス小玉を有していたことが明らかになりました。

参考文献

- 大賀克彦 2002 「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳』
大賀克彦 2010 「日本列島におけるガラスおよびガラス玉生産の成立と展開」『月刊文化財』566
肥塚隆保・大賀克彦・田村朋美 2010 「材質とその歴史的変遷」『月刊文化財』566
小寺智津子 2016 「古代東アジアとガラスの考古学」同成社
齊藤あや 2014 「関東地方における玉類の流通と画期」『西相模考古』第 23 号西相模考古学研究会
田村朋美 2015 「引き伸ばし法によるガラス小玉の系譜と伝播」『物質文化 考古学民俗学研究』95
中井泉 2013 「ガラスの魅力を科学する」『Ancient glass feast of color 古代ガラス-色彩の饗宴-MIHO MUSEUM』
福島雅儀 2006 「古墳時代ガラス玉の製作技法とその痕跡」『考古学と自然科学』54
James W.Lankton and Laure Dussubieux 2006 "Early Glass in Asian Maritime Trade:
A Review and an Interpretation of Compositional Analyses". *Journal of Glass Studies* 48, 121-144
Katsuhiko Oga and Tomomi Tamura 2013 "Ancient Japan and the Indian Ocean Interaction Sphere: Chemical compositions, chronologies, provenances and TradeRoutes of Imported Glass Beads in the Yayoi -Kofun periods (3rd Century BCE – 7th Century CE)" *Journal of INDIA OCEAN ARCHAEOLOGY* 9
Peter Francis, Jr. 1990 *Glass Beads in Asia Part Two. Indo-Pacific Beads*.
佐々木憲一・小野寺洋介・尾崎裕妃 2015 「茨城県石岡市佐塚古墳再測量調査報告」『考古学雑刊』第 11 号
後藤守一 1957 『常陸丸山古墳』山岡書店
谷仲俊雄 2017 「佐久ノ上内遺跡—木の墨書の意味は・・・」『第 3 回石岡市文化財調査報告会発表要旨』
日高慎 1998 「茨城県 前期古墳から中期古墳に」『第 3 回東北・関東前方後円墳研究会大会シンポジウム前期古墳から中期古墳へ 発表要旨資料』



図1. 丸山古墳・佐自塚古墳周辺図

(谷村 2017「佐久上ノ内遺跡」「第3回石岡市文化財調査報告会発表要旨」より転載)

表1. 調査対象資料

古墳名	測定数(点)	内訳(点)		
		紺色小玉	紺色大型	淡青小玉
丸山古墳	71	4	1	66
佐自塚古墳	8	0	0	8



図2. 上：丸山古墳出土ガラス小玉（石岡市所蔵）

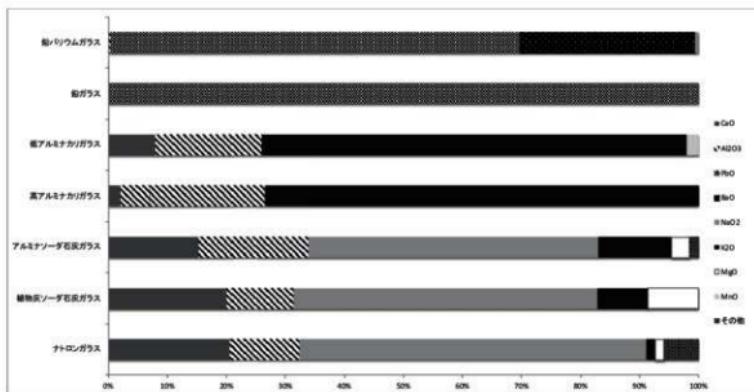
下：佐自塚古墳出土ガラス小玉（明治大学所蔵）

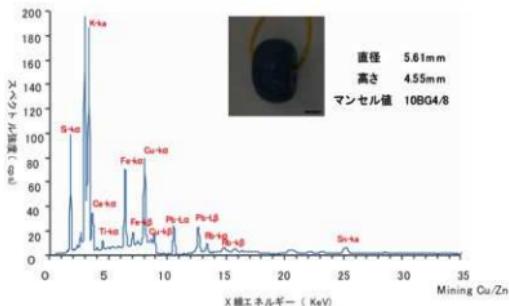


図3. ハンドヘルド型蛍光X線分析装置を用いたエジプト新王国ツタンカーメン副葬品の調査

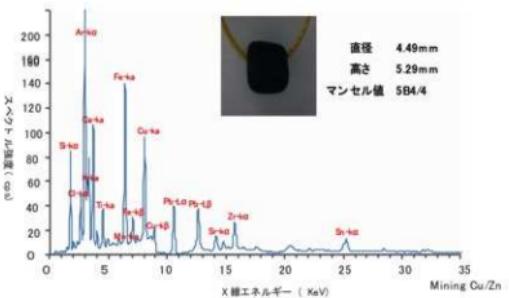
表2. 日本列島で流通したガラスの分類

ガラスの組成による分類		起源・地域	融剤
鉛バリウムガラス		中国	PbO (方船瓶など)
鉛ガラス		西アジアから東アジア	PbO (方船瓶など)
カリガラス	低アルミニカリガラス	南アジア	K ₂ O (植物灰など)
	高アルミニカリガラス	ベトナム北部 中国南部	K ₂ O (植物灰など)
アルミニナソーダ石灰ガラス		南アジアから東アジア	Na ₂ O, CO ₂ , Na ₂ O, Al ₂ O ₃ (植物灰など)
ソーダ石灰ガラス	植物灰ソーダ石灰ガラス	西アジア・地中海沿岸	Na ₂ O, CO ₂ , Na ₂ O (植物灰など)
	ナトロンガラス	不明(地中海沿岸)	Na ₂ CO ₃ ·10H ₂ O (天然ソーダなど)

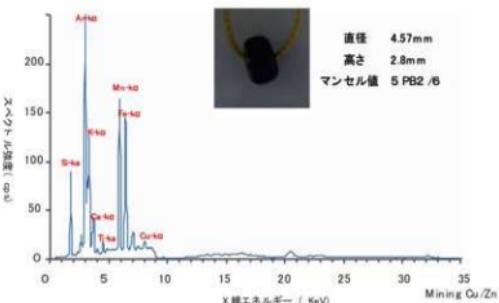
図4. SiO₂を除く主成分の割合



丸山古墳 出土ガラス小玉 MY1-20 高アルミナカリガラス



丸山古墳 出土ガラス小玉 MY1-2 アルミナソーダ石灰ガラス



丸山古墳 出土ガラス小玉 MY1-67 低アルミナカリガラス

図5. ガラスタイプごとのスペクトル図

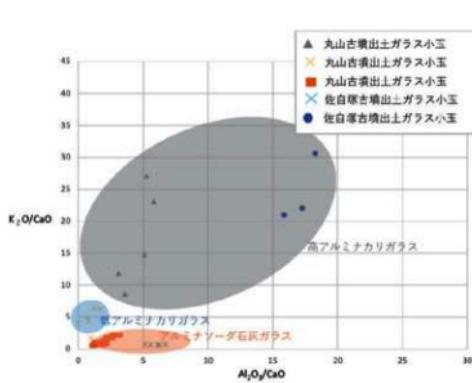


図6. 主要成分の含有比によるプロット図

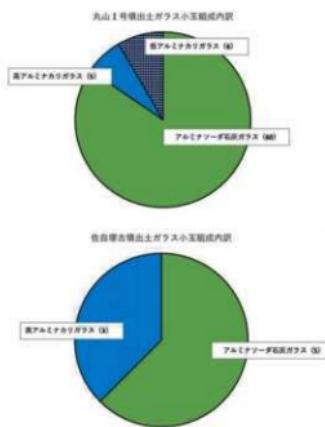


図7. ガラスタイプの内訳

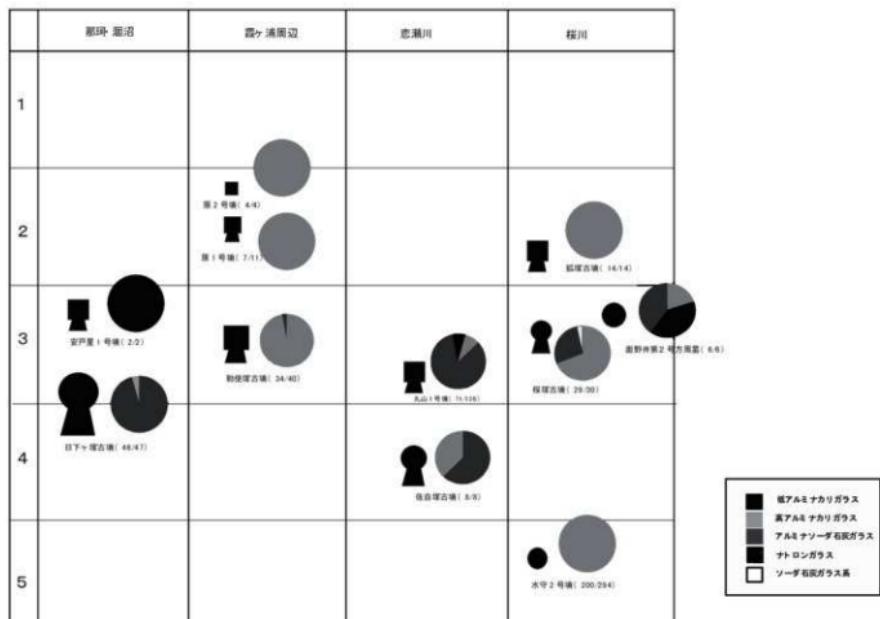


図8 ガラス小玉が出土した前期古墳編年表

(日高1998を元に作成)

か こ おおつかやま 鹿の子大塚山古墳

石岡市鹿の子

「常陸国」成立の鍵を握る古墳

石岡市教育委員会 谷仲俊雄

古墳の立地・群構成

鹿の子大塚山古墳は、茨城県石岡市鹿の子三丁目に所在する古墳です。恋瀬川と山王川にはさまれた台地上に位置し、南西約1kmには古墳時代後期から終末期の群集墳である染谷古墳群が存在しています。南東には国衙工房である鹿の子遺跡、特別史跡常陸國分尼寺跡、特別史跡常陸國分寺跡、史跡常陸國府跡が位置しています(図1)。

現在本古墳は単独で存在しています。市内照光寺所蔵の正徳3年(1713)の府中村上染谷絵図には本古墳が黒点で描かれていますが、その周辺にはそれよりやや小さな黒点が10ヶ所余り描かれています(図3、石岡市文化財関係資料編纂会1996)。これらは現在残っていませんが、もともとは「鹿の子古墳群」と呼べるような古墳群を形成していたと考えられます。本古墳は、そのなかで最も規模が大きな古墳であり、今まで良好に残る唯一の古墳と言えます。

地元では「大塚山」と呼び、「兵庫頭のお墓」と口承され、荒らすものには腹痛を伴う祟りがあるとされていました。昭和19年、石岡に駐留していた橋部隊の一分隊が防空壕(戦車壕)を掘削したところ、隊長はじめ兵隊たちは悪寒を覚え、悪夢に襲われるなどして、作業は中止になったと言われています(今泉1956)。現在でも墳丘西側の斜面に残る大穴が、この壕の跡とされています。

古墳の概要

調査歴 平成10年度に石岡市教育委員会が、測量・確認調査を行いました(青木・多ヶ谷2001)。

墳形・規模 墳丘径約28m、高さ約4.8mの円墳と考えられます(図4)。

外表施設 古墳の周囲には幅9m程度の周堀がめぐっています。これを含めた全長は46mとなります。

墳丘構築法 墳丘は全体が盛土で構築されています。ローム主体の土と黒色土を墳丘上部では10~30cm、下部では40~60cmの単位で互層状に盛土していました。

埋葬施設 墳頂部は30cm程度掘り下げを行っていますが、埋葬施設は確認できていません。また、ピンボーラによるボーリング調査でも石棺材は確認できていません。横穴式石室や木棺、あるいはより深い位置や裾部に

箱式石棺が存在している可能性が考えられます。

築造時期

出土資料から 本古墳と同規模以上の古墳の場合、古墳時代中期から後期に築造されたものであれば、埴輪を樹立しているのは通有です。本古墳では埴輪片の出土は皆無であることから埴輪が樹立されていなかった、したがって古墳時代前期、もしくは後期末葉から終末期の築造が想定できることになります。

墳丘から 墳丘径に対して墳頂部の平坦面が狭いという特徴があります。墳頂部の平坦面は、古墳時代中期から終末期になるにしたがって縮小するという傾向があり、古墳時代後期中葉以降の築造が想定できます。さらに、終末期でも後半になると、円墳から方墳への墳形の転換傾向がうかがえます。したがって、古墳時代後期中葉から終末期前半の築造が想定できます。

また、終末期の風返浅間山古墳(かすみがうら市)の墳丘と類似しており、1/2相似墳の可能性も考えられます。

小結 古墳時代後期末葉から終末期前半、7世紀初頭から前葉の築造と考えられます。風返浅間山古墳の墳丘との類似を積極的に評価すれば、終末期前半に限定することも可能となります。

古墳の評価

石岡市内の終末期古墳としては、最大級の規模を誇る古墳となります。本古墳の造営に続く7世紀後半には、茨城郡守や常陸國府が造営されます。本古墳は同一台地上で最も国府に近い古墳であり、古墳から律令国家への動向を考えるうえで鍵となる古墳と言えます。

文献

青木 敬・多ヶ谷香里 2001『茨城県石岡市鹿の子大塚山古墳確認調査報告』『石岡市遺跡分布調査報告』

石岡市文化財関係資料編纂会 1996『石岡の地名』

今泉義文 1956『さわると祟りある 大塚山古墳』『石岡市郷土誌資料』

谷仲俊雄 2017『茨城県石岡市鹿の子大塚山古墳について』『婆良岐考古』第39号

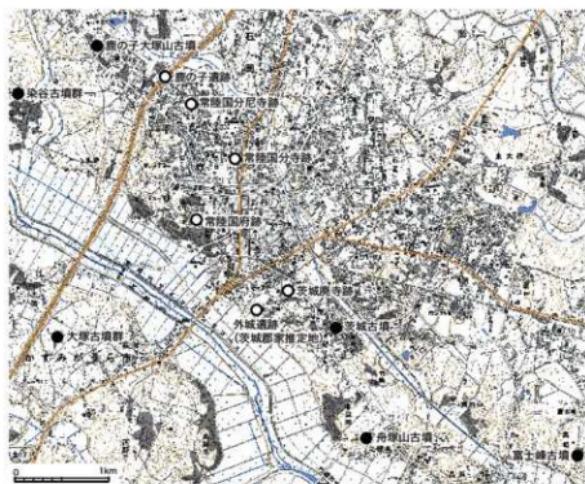


図1 鹿の子大塚山古墳の位置と周辺の遺跡（1）

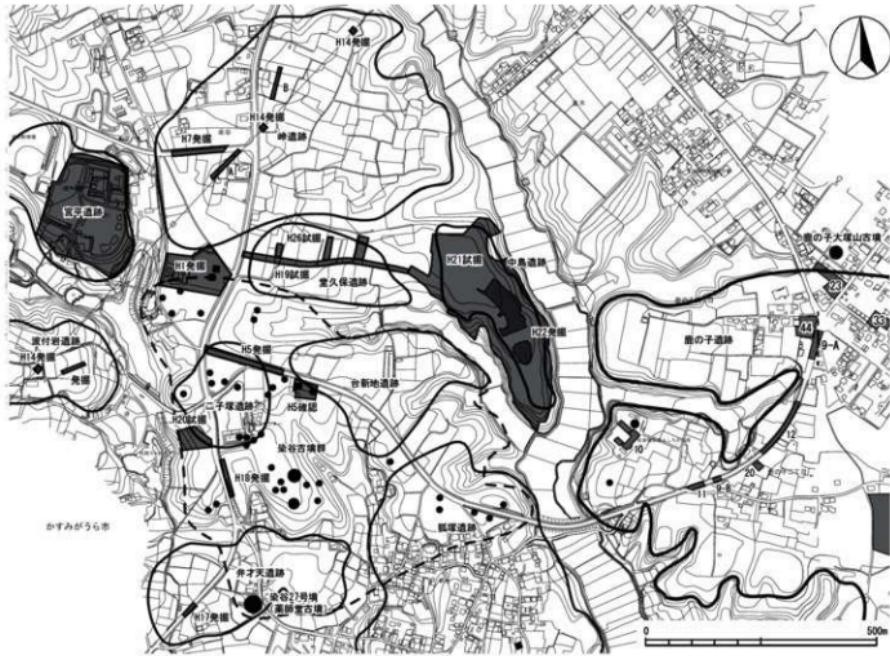


図2 鹿の子大塚山古墳の位置と周辺の遺跡（2）

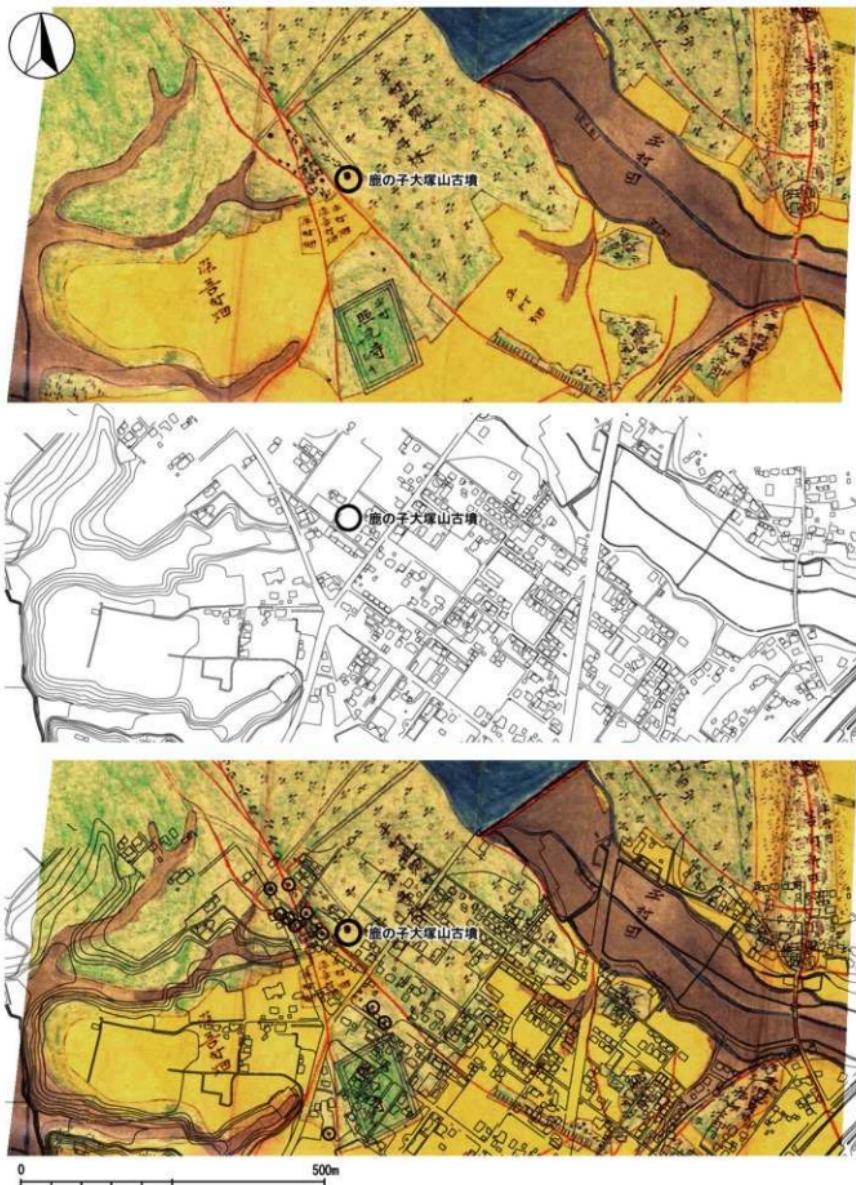


図3 正徳3年(1713)府中村上染谷絵図 ($S=$ 約1/800)

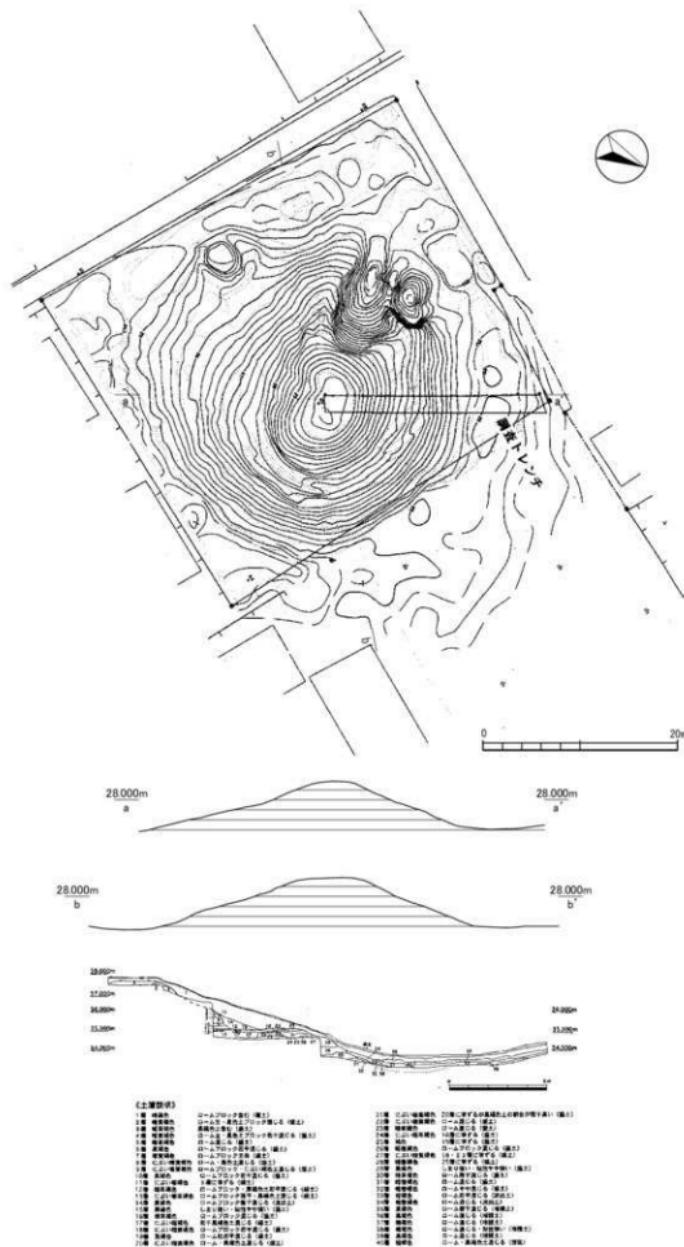


図4 鹿の子大塚山古墳 測量図・エレベーション図 (S=1/500), 土層図 (S=1/250)

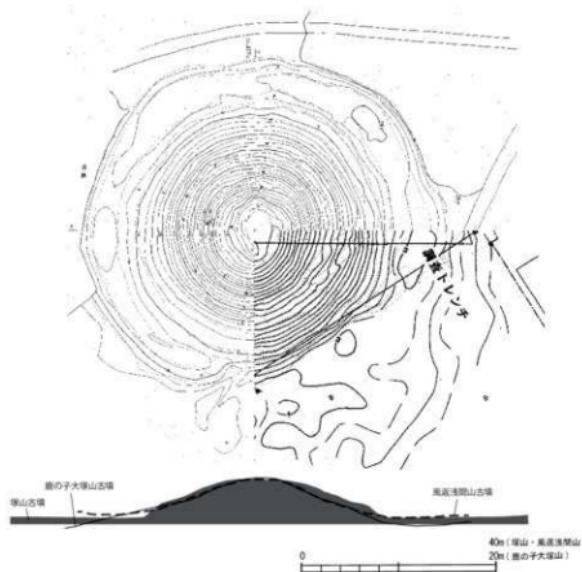


図5 鹿の子大塚山古墳と風返浅間山古墳・塚山古墳

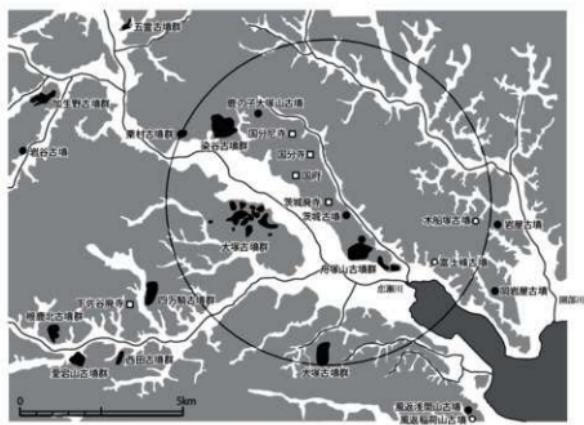


図6 常陸國府周辺の後期末～終末期古墳位置図

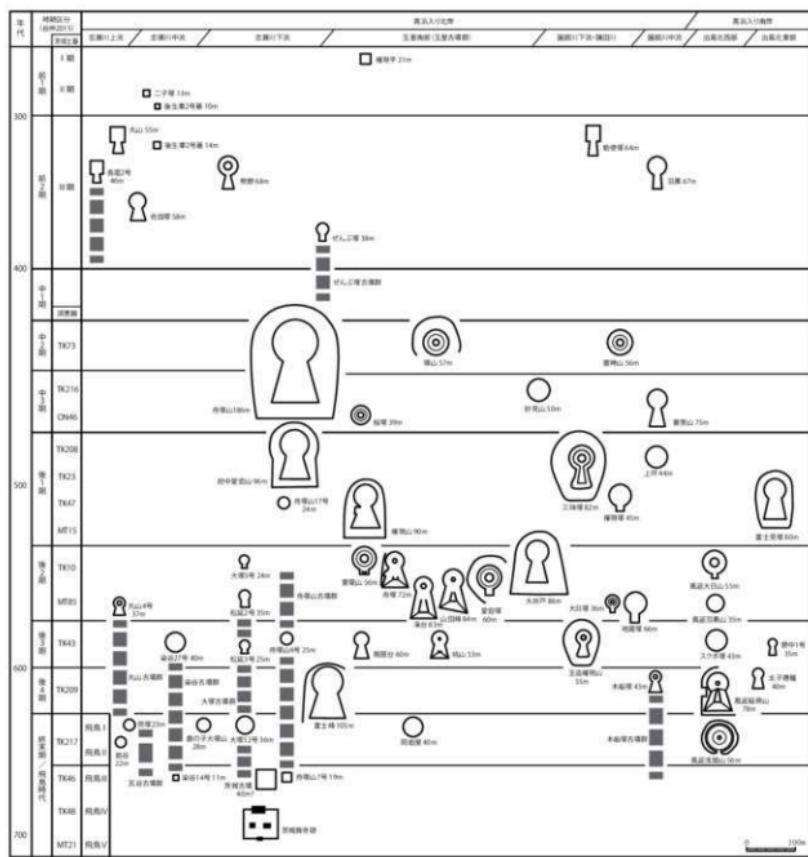


図7 露ヶ浦高浜入りの古墳編年

かすみがうら市愛宕山古墳群とその周辺

かすみがうら市新治

かすみがうら市歴史博物館 大久保隆史

愛宕山古墳群の概要

愛宕山古墳群は、天の川（恋瀬川の支流）を望む標高20m～30mの比較的平坦な台地上に位置しています。また、東西を小支谷に挟まれており、当古墳群はその谷津頭にあたる部分に分布しています。全4基の円墳からなっており、遺跡地図において1号墳は径26m・高さ4.5m、2号墳は径15m・高さ1.5m、3号墳は径34m・高さ5.5m・周溝幅6m、4号墳は径11m・高さ0.3mと記載されています。

このうち、第1号墳は、道路改良工事に先立ち平成27年度に発掘調査が実施されました。調査区は墳丘のごく一部と限定的ではありましたが、周溝の一部が確認され、直径が25m以上であることが判明しました。古墳に伴う遺物としては、破碎された土師器の甕1点のみとなっており、この土器の時期から、1号墳の築造年代は6世紀末～7世紀初頭と推定されています。

この他、古墳群中最大の規模を誇る3号墳では、古墳時代後期の埴輪片が採集され、1号墳に先行して築造された古墳と目されます。

愛宕山古墳群と周辺の歴史遺産

愛宕山古墳群のほぼ中央を、市道が貫いております。この市道は、古代の東海道及び中世の鎌倉街道に比定されています。そのため、周辺には数多くの歴史遺産や、伝説が残されています。

・二子塚と子安社

愛宕山第1号墳・2号墳は、通称「二子塚」と呼ばれており、八幡太郎義家の妻がこの地で双子を出産したとの言い伝えがあります。また、愛宕山1号墳の墳頂には、小祠が安置されています。これは後述の子安神社からの勧請と推定されます。小祠の中には木製の男根が安置されており、これを持ち帰り子宝を望む夫婦が枕元に置くことで、不思議と子を授かると伝わっています。

・愛宕神社と稻荷社

愛宕山3号墳には、愛宕神社と稻荷様が安置されており、現在でも地元の方々によって篤く崇敬されています。愛宕神社のすぐ北側には土俵が作られており、奉納相撲も行われていたということです。

・胎安神社と子安神社

胎安神社と子安神社は、いざれも安産・育子の崇敬

を集める名社で、古代に遡る創建とされています。両社は、古代東海道・中世鎌倉街道を挟んで鎮座しています。

胎安神社（旧：香取神社）は、木花咲耶姫命と経津主命を主祭神とし、天平宝字6年（763）9月創建と伝わっています。社伝によれば、当初は経津主命を祀り、相殿に胎安の神を祀ったとされています。その後、源賴義・義家父子の参詣があり、「笹竜胆」の紋章使用を義家から許されました。近世に入ってからも、志筑領主本堂氏や土浦藩主土屋相模守による崇敬を集めました。

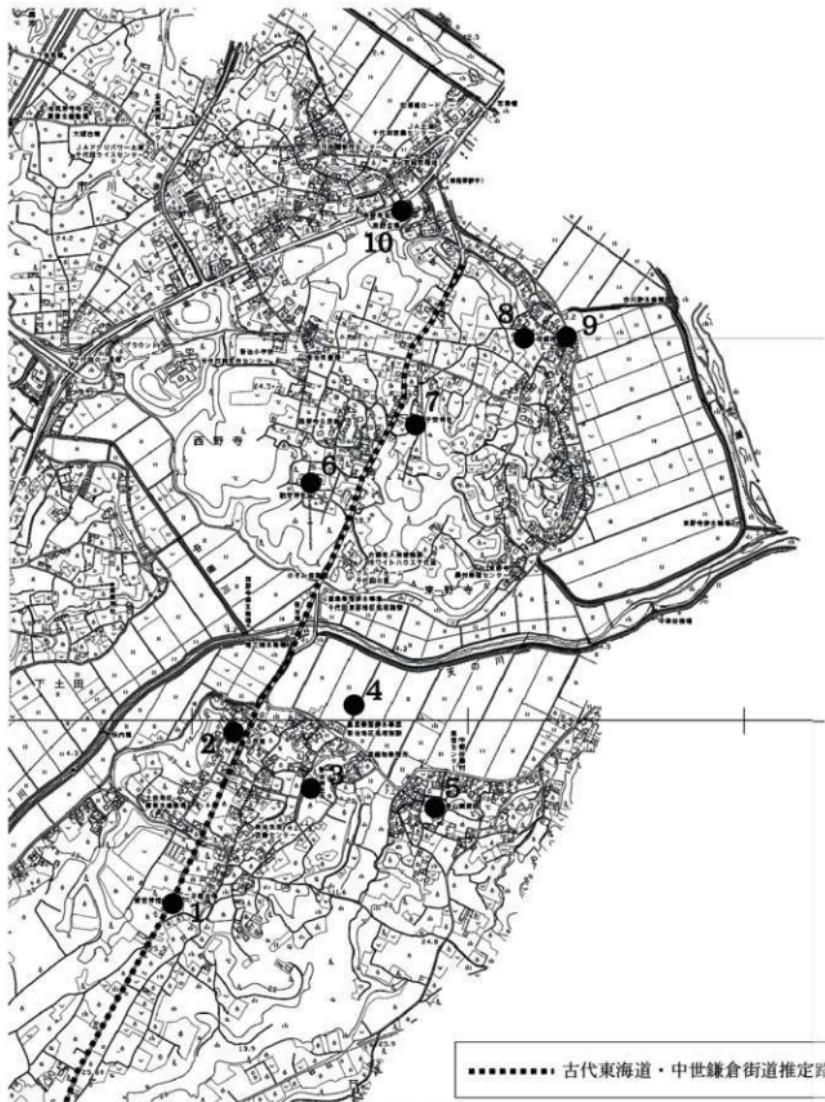
子安神社は、木花開耶姫命と武甕槌命を主祭神とし、大同2年（807）創建（鹿島大神【武甕槌命】と富士浅間大神を鎮斎）と伝わっています。その後、胎安神社と同様に源賴義・義家父子による参詣・報賽がありました。江戸時代初期の建立と考えられている社殿は、絢爛たるものです。

歩いて感じる地域の歴史

文中で紹介した場所以外にも、かすみがうら市新治地区から東野寺・西野寺地区には、幅広い時期の歴史遺産が散在しています（図・写真参照）。これらは、いざれも長い時代を経て今に伝わっているものです。忘れ去られてしまいつつある歴史の語り手は、ひそりと地域にあります。そして、聞き手が耳を傾けた時には、貴重な地域の歴史を語りかけてくれます。今後も、地域に残された歴史遺産を、後の世代に守り伝えていければと思います。

文献

- 谷句・橋邊優尚・大賀健・大久保隆史 2016『愛宕山古墳群第1号墳』かすみがうら市教育委員会
千葉隆司・大間武 2015『茨城郡の駅路と伝路』『古代東海道と古代の道』茨城県教育委員会
千葉隆司 2015『かすみがうら市の鎌倉街道』『鎌倉街道と中世の道』茨城県教育委員会
新治地区神社誌編集委員会 1992『新治地区神社誌』茨城県神社庁新治支部
千葉隆司 2008『日高見の国、そして常世の国への憧れ—霞ヶ浦高浜における古代国家の黎明—』『婆良岐考古』第30号 婆良岐考古同人会



図：古代東海道・鎌倉街道沿いの歴史遺産(都市計画図より作図 任意縮尺)

- | | |
|--------------|---------|
| 1 愛宕山古墳群 | 6 豚安神社 |
| 2 市村古墳群 | 7 子安神社 |
| 3 新治神社・新治古墳群 | 8 夫婦塚古墳 |
| 4 新治の井 | 9 地福院 |
| 5 栗山宝藏院 | 10 熊野古墳 |



愛宕山 1 号墳調査風景①



愛宕山 3 号墳の愛宕神社(右)・稻荷社(左)



愛宕山 1 号墳調査風景②



新治神社



新治の井(遠景)



愛宕山 1 号墳墳頂の子安社



子安社内に安置された木製の男根



新治の井(近景)



栗山宝藏院の木造阿弥陀如来立像(県指定文化財)



子安神社



子安神社の瓦製祠



胎安神社

地福院の
金銅仏多聞天立像(下)
木造天部形立像(右)
(県指定文化財)



胎安神社の絵馬



熊野古墳(県指定文化財)



胎安神社の瓦製祠

ふなつかやま 石岡市舟塚山古墳からみた5世紀の大変革

茨城大学人文社会科学部 田中 裕

はじめに

古墳時代は日本列島の国家形成期に当たり、中期は、「古墳」の最盛期と説明される。暦年代ではおよそ5世紀（A.D. 401～500年）に当たる。ただし最近の年代決定法では、4世紀後葉はすでに中期、との見方が強い。

『高句麗好太王碑』には、A.D. 399～404年の間の、高句麗と倭との交戦記事がある。これは『神功紀』の内容と対応するが、年代は合わない（「神功皇后」は架空説が強い）。中期の幕開けを考える上での留意点となっている。

1 茨城県内の中期古墳と最新調査

（1）茨城県内の中期古墳

a 数少ない前方後円墳

茨城県石岡市舟塚山古墳（186m）・水戸市愛宕山古墳（136m）・石岡市府中愛宕山古墳（96m）・筑西市宮山觀音古墳（91m）・東海村松権現山古墳（86m）・ひたちなか市川子塚古墳（80m）・牛渡銚子塚古墳（63m）・つくば市土塔山古墳（61m）等

b 全国的にみても大型の円墳

常陸太田市高山塚古墳（90m）・大洗町磯浜車塚古墳（88m）・笠間市御前塚古墳・藤塚古墳（ともに60m）・茨城町諫訪山1号墳（55m）・美浦村弁天塚古墳（55m）・ひたちなか市三ツ塚12号墳（51m）・小美玉市塚山古墳（50m）・笠間市山王塚古墳（50m）など
80m以上の円墳は、全国で約10基しか知られていない「超大型」

（2）石岡市舟塚山古墳の調査（明治大学・茨城大学ほか）

a 墳丘長186mの前方後円墳（胴長形・三段築成：但、前方部段築はせり上がる）

b 盾形周溝 ほぼ全周していた可能性が出てきた

c くびれ部造出し 両側2カ所？（主軸に向かって左側は確実）土器+形象埴輪？

d 陪塚 主軸は外れる

e 墳輪 有黒斑・タテハケ 均整で統一的な円筒埴輪

f 莢石 なし

g 埋葬施設 レーダー探査：後円部墳頂に2基ないし1基（主軸右側に粘土構か）

（3）水戸愛宕山古墳の測量調査（茨城大学）

a 墳丘長140mの前方後円墳（寸胴形・平坦な二段ないし三段）

b 盾形周溝 全周

c くびれ部造出し あり？（主軸に向かって右側は可能性あり）

d 陪塚 なし 近くに姫塚古墳（前方後円墳）あるも詳細不明

e 墳輪 有黒斑・タテハケと板ナデ、凸凹多様（幅広含む） 多様で不整形の円筒埴輪

f 莢石 なし

（4）ひたちなか市三ツ塚第13号墳の測量調査（茨城大学）

a 墳丘長約70mの帆立貝形古墳

b 墳輪 筒状壺形埴輪

c 莢石 あり

2 近畿の巨大古墳の特徴（古墳時代中期）

（1）百舌鳥古墳群（大阪府堺市）

a 仁德陵古墳（486m）・履中陵古墳（365m）・土師ニサギ古墳（288m）・御廟山古墳（203m）

b 脇長形

（2）古市古墳群（大阪府羽曳野市・藤井寺市）

a 応神陵古墳（420m）・中ツ山古墳（286m）・仲哀陵古墳（238m）・允恭陵古墳（227m）

b 寸胴形

（3）佐紀盾列古墳群（奈良県奈良市・佐紀町）

a 神功陵古墳（276m）・ウワナベ古墳（265m）・市庭古墳（250m）・ヒシアゲ古墳（218m）

b 寸胴形（神功陵古墳）+脇長形（ウワナベ古墳）

（4）馬見古墳群（奈良県北葛城郡広陵町・河合町・磯城郡川西町）

a 川山古墳（204m）・新木山古墳（200m）・島の山古墳（195m）

b 脇長形

3 倭五王の時代

（1）巨大古墳

- (2) 史資料と仁徳陵古墳
 - a 仁徳陵古墳に関する資料
 - b 仁徳譚（「高台眺望譚」「イワノヒメの木津川曳舟」「百舌鳥耳原の寿陵」）
 - (3) 『宋書』倭国伝
 - a 「讃・珍・濟・興・武」：倭讃、倭隋など中国風に姓・名を名乗る
 - b 「倭王武上奏文」と雄略譚
- 4 「畿内」の王権をめぐる議論
- (1) 「河内政権」論
 - a 応神を祖として河内を基盤とする政権論（万世一系を否定した王朝交代論の一つ）
 - b 直木孝次郎・上田正昭らによる
 - (2) 古墳の「規制」論
 - a 前期まで前方後円墳であった古墳群が中期に帆立貝式古墳や円墳になる現象
 - b 5世紀に「古墳」築造への強力な「規制」が2度かけられたとする小野山節の説
 - (3) 「前方後円墳体制」論
 - a 王権中枢における有力者の交替が、地方の有力者交替と連動する
 - b 前方後円墳を頂点とする身分秩序と「トモ」的紐帶の完成とする都出比呂志の説
 - (4) 大王の「后」墓論
 - a 佐紀盾列古墳群の位置づけ
 - b 白石太一郎による「畿内」の中の複数系譜と本貫地埋葬説
- 5 東日本との比較からみた古墳時代中期（5世紀）の変革
- (1) 東関東の中期古墳
 - a 舟塚山古墳体制
 - b 水戸愛宕山古墳体制？
 - c 上流から下流域（平野・海浜）への最大古墳の移動
 - (2) 「畿内」の中期
 - a 古市・百舌鳥古墳群体制
 - b 両古墳群は独自系統の墳丘形態（奈良にも巨大古墳あり、巨大円墳：富雄丸山古墳も）
 - c 大和川上流から下流域への最大古墳の移動
 - d 馬飼集団のムラは大阪平野（その他、須恵・土師に

関するムラも）

- e 大阪市法円坂遺跡（巨大倉庫群）

(3) 中期の陸上交通革命

- a 東日本における土師器甕の「驚異的」斉一化（西日本も斉一化）
- b 内陸部における陸上交通活発化の社会的インパクト（馬による陸上交通革命）
中部高地（天竜川上流）における石器消滅・鉄器流入と前方後円墳
- c 水上交通の相乗効果による発展（舟の表示の活発化：のちに競合関係へ）

おわりに

- a 古墳時代中期（5世紀）は王と民衆の蜜月時代
- b 複数系統の競合関係明確化、所属集団の既成概念化
- c 蜜月のおわりと武断的体制





水戸市愛宕山古墳 測量図

『茨城県中央部の古墳調査—測量報告（墳丘・石室・遺物）一』
茨城大学人文社会学部考古学研究室 2018年

第4回 石岡市文化財調査報告会
発表要旨

2018（平成30）年8月25日発行

編集 石岡市教育委員会 文化振興課

発行 石岡市教育委員会
〒315-0195 茨城県石岡市柿岡5680-1
常陸風土記の丘

〒315-0007 茨城県石岡市染谷1646

印刷 共和印刷株式会社
〒315-0001 茨城県石岡市石岡2747-68
